

ローン・ワードから連想する動詞表現

大原 荘司

1. 英語表現の難しさについて

英語の学習にかけた時間とその効果の費用対効果比を考えた場合、われわれ日本人のケースは、比較的低いランクに甘んじていることになるのであろう。筆者自身も、民族によって異なる言語を用いるというこの愉快的現象に興味を持ち続け、特に若いころは、様々な言語の学習に膨大な時間を費やしたが、言語中枢に恵まれなかったためか、その効果を大いに享受できたとは言い難い。仕事上アメリカの技術者とのやり取りや、国際会議でのやり取りなどで表現に詰まることがたびたびで、その都度切り抜けてはきたが、いったいこれはどういう事態なのかといつも頭を悩ませてきた。筆者は言語学の専門家ではないが、言語学のユーザーとしての経験は専門的といえるだろう。記号学が情報学に含まれるとすれば、本ノートのような取り組みも筆者にとって無縁のものではないと考えている。

さて、筆者のユーザーとしての経験から、英語習得の困難さは、主に次の3つの理由によるものと考えられる。

1) 日常の日本国内での生活文化の中で、英語で理解したり表現したりする必要性が少ない。これは、すぐに納得できる理由で、英語漬けになるような環境にわざわざ身を置けば、それなりの成果が上がることは推測できる。筆者もボストン出身のアメリカ人のホームステイを1ヶ月間受け入れた際には、会話がかなり自由にできるようになったことが自覚できて痛快だった。最近話題の「聞き流し」の語学勉強法については、筆者は試していないので論じられない。しかし、わけもなく身につくのは若いうちで、日本語文化に浸りきった年齢になれば何らかの合理的手立ても必要である。

2) アルファベットと質的に異なる、漢字の表現力の影響。

わずか26文字でこの世のすべてを表現しようとする文化と、約2200文字の常用漢字を駆使してこの世を表現しようとする文化は、質的に異なり、克服すべき壁は大きい。古代ギリシャで「概念の発見」が起こり、ひいては17世紀に近代科学が成立したのも、言語表現の経済による要因が最も大きいと筆者は考えている。2200文字もあれば組み合わせの数は膨大であり、概念として整理、省略するまでもなく、個別事象に個別の表現を造語で割り当てることが可能であった。そのために、叙事にしても叙情にしても、僅かな違いを細やかに表現仕分けてきたのが日本語の特徴の一つではなかろうか。日本語で発想したことを英語に変換することに苦労するのは、このことによるのではないかと考えている。日本語での発想を因数分解しても、なかなかいわゆる **have** や **get** などの基本動詞表現には行き着かないのは、當然ともいえるのではないか。以前ある本で、「英語話者は、平易な単語を幾つか組み合わせる表現に身近なものを感じる。」とあるのを読んだことがある。例えば、「可能性」というと「**possibility**」と筆者などは変換したくなるが、「**what might have been**」とするほうが普通だというわけである。このことは、字幕付きの洋画を見ていると気がつくことである。字幕には難しい四字熟語が並んでいるのに、聞こえてくるセリフの

英語は極めて簡単な単語を並べているだけなのである。このことは、イギリスの言語学者に確かめたが、あまり自覚していることではなさそうである¹⁾。あるいは、フェアの精神から来た習慣なのかもしれない。

3) <する>言語と<なる>言語の違いの影響²⁾

英語は人間中心的、個体的で行為者を際立たせる傾向があり、日本語は非人称的、コト的であるといわれている。日本語で、主語もなく「春になった」というところを「**Spring has come.**」というのは、春という行為者、来るという行為を際立たせているというわけだ。英語がVO言語で、動詞(V)を重んじ、日本語は、逆のOV言語で名詞、目的語(O)を重んじるという価値観の違いによるものである。価値観の転換まで、言語習得に反映させるべきかどうかは疑問であるが、動詞表現の克服が英語習得にとって重要であることは間違いないようである³⁾。動詞に重きが置かれる主語の採り方も日本語とは随分異なってくる。次の例のように、無生物が主語になることがあり⁴⁾、これも越えがたいものを感じる。

Five minutes' walk along this road will bring you to the station.

さて、以上3つの英語習得の困難さの要因のうち、2)と3)の要因の対策が本ノートの提案である。

2. ローン・ワードを活用した動詞表現

ローン・ワードと気取って言ってみたが、いわゆる外来語のことで日常750語もの主に英語に由来するカタカナ語を用いられている。コンピュータなど、技術、学術分野で常用されるカタカナ語を含めると1000語をこえるであろう。漢字だろうと英語だろうと「てにをは」で繋いでしまおうという日本語の貪欲な言語感覚によるのだろう。中には、コンプライアンス、アドバンテージ、アンビバレンスなど、ことさらにも思える英語が多用されているが、これらは一種の神秘主義、権威主義の現れではないかと思う。むしろ民族主義を助長しない程度に本居宣長に倣って「やまとことば表現」を開発すべきである。日本人の深層に響くことが必要と考えるならであるが。

すでに使い慣れてしまったローン・ワードに対しては、われわれはネイティブに近い語感を持っているはずだから、それを利用しようというのが本ノートの主旨である。ただし、日本語は名詞を重んじ、ローン・ワードもほとんどが名詞であるので、本来持っている動詞の意味を蘇らせて使おうという工夫が必要である。

たとえば、アウトライン (outline) は、概略の意味でよくつかわれるローン・ワードであるが、英語としては本来、概略を説明するという動詞でもある。この点は語感的に無理なく連想できるわけで、雑誌「Time」で見つけた次のような使い方も想起しやすいはずである。

The view of environmental change outlined in the illustration.

エレベーター (elevator) は、子供の頃から使っている言葉であり、だんだんに上がってゆくという意味を体感している。したがって、

The spread of data was observed at elevated temperature.

のような使い方も連想しやすい。

プロペラから連想できる propel(駆り立てる)も雑誌でよくお目にかかる動詞である。

He is **propelled** by powerful ambition.

日常会話でよく使われるような基本動詞と前置詞の組み合わせでできた、いわゆるイディオムは、慣用しないとわれわれにとっては想起しにくいという欠点がある。もっともある本によると、「傘は部屋の隅に立ててくれ」というのを

Put your umbrella in the corner.

とって、stand という動詞を使わないで put という基本動詞を使うのは、具体的行動を相手に委任しているからだという見方もあるが、これなどは表現力というよりは、教養の働きの及ぶ心遣いの範疇ではないかと思う。

筆者が雑誌などの文例からサンプリングした、動詞として使えるローン・ワードは250語ほどであるが、次にその一部を列記する。

3. ローン・ワードの活用例

日本語として用いられているローン・ワードとその意味の連想から動詞として使えそうなものを選び、実際に雑誌の記事などで使われた例を併記する。

アクセル	Brain exercises can accelerate the progression. (促進する)
アナウンス	They announced him as the best actor of the year.(発表する)
アプローチ	He is easy approached . (近づく)
アラーム	He is alarmed at the news. (警告する)
アンカー (固定治具)	He anchored his coat with a big stone.(固定する)
バック (背景)	The Khmer Rouge is backed by China. (背後で支援する)
バランス	The income should balance with the expenditure.(釣りあう)
ボーク (投手の反則)	He balked at making a speech. (ためらう)
ブリッジ	trying to bridge the gap
ブレンド	His colleagues marveled at how he blended in with the peoples.(溶け込む)
ブラシ	The foreign exchange markets brushed off the news. (払いのける)
センター (中心)	He talks centered on two key issues. (中心を置く)
コンタクト	I contacted him by e-mail. (接触する)
コピー	You should copy your sister. (真似る)
コスト	The battle cost dozens of lives. (犠牲を払う)
コンサルタント	I will consult a teacher about my son's education.(相談する)
カーテン	curtained with secrecy (覆う)
デバイス	Each computer company has devised strikingly different sets of programs. (工夫する)

ダンプ	You shouldn't dump your problem. (投げ捨てる)
ドッジ	tax dodging corporation (すり抜ける)
ドロップ	He dropped a smile. (こぼす)
フェイス	The economic experiment also faces challenges. (面と向かう)
フォーカス (焦点)	Their discussion focused on Japan's increased sharing. (焦点をあてる)
フォロー	We follow a policy based on this issue. (従う)
フォーム	He formed the clay into a bowl. (作る)
ジェスチャー	He gestured for another drink. (身振りで示す)
グラウンド	I always ground my arguments on facts. (基づかせる)
グループ	The family grouped themselves around the fire. (集める)
ヘッド	So many foreigners are headed to Budapest for business. (向かう)
ハート	It is heartening that the winds of freedom are blowing in Africa. (元気づける)
ハイヤー	He hired the a workman to repair the fence. (雇う)
ハイライト	Can you highlight some implications of this new situation? (取り上げる)
ヒント	Stop hinting and tell me frankly. (ほのめかす)
ハウス	The island would house as many as 5 million people. (収容する)
イラスト	He illustrated the new theory with several examples. (実例で説明する)
ラベル	Skeptics labeled the U.S. action as self-centered. (レッテルを貼る)
リフト	The earth's rigid shell is lifted . (持ち上げる)
リミット	France limits Japanese imports to 3% of its market. (限定する)
レベル	Level up your speech to the class. (レベルをあわせる)
ローン	I loaned my tuxedo to him. (貸す)
メイキャップ	Japan should make up economically for what it cannot afford militarily. (補う)
マーク (印)	Mark what you should do. (注意する)
メリット	At the moment, the whole issue merits a "maybe". (値する)
マインド	Mind the gap. (気をつける)
ネーム (名前)	He was named dean of medical school. (任命する)
ニーズ	Also needed is an appreciation of the regional faces

	of change.(必要とする)
パッキング	Have you finished packing ? (荷造りする)
パニック	Some panicked , some prayed. (パニックに陥る)
パート	The war parted many people from their family. (引き離す)
ポーズ	She paused to look back. (立ち止まる)
ピアス	After being pierced , the entire object was ground and finely polished. (突き通す)
ピン	She remained pinned to her chair until she rolled onto the floor. (釘付けにする)
プラン	We are planning to go on a trip to Europe. (計画する)
レース	He raced with a person for a prize.(競争する)
レンジ (範囲)	Operations range from Spain to Germany. (及ぶ)
リーチ (手の届く範囲)	You can reach the target scope. (到達する)
リラックス	The U.S. relaxes controls on computer sales to the Soviets. (緩和する)
リスク	I'll risk it. (やってみる)
スイッチ	He switched conversation from a painful subject to another. (切り替える)
スケジュール	The match is scheduled for Monday. (予定する)
スコア (得点)	The recent superpower summit scored only a modest success on hard issues. (成果をあげる)
ショック	His behavior shocked me. (ショックを与える)
シャワー	The audience showered applause on him. (喝采を浴びる)
スピード	He sped his pen across the page. (急がせる)
スポンジ	trying to sponge up information from West (吸収する)
サスペンダー	Had the yearning for political change been merely suspended ? (棚上げにする)

4. まとめ

国際語としての英語は、あまり文法にこだわらず、一番重要で我々にとって想起が難しい動詞を繰り出す方法を工夫して使おうというのが本ノートの主張である。ちなみにプログラミング言語は文脈自由文法なのである。人間の動きなど限られているようでありながら、あらためて人間は動詞的生物であると気付かされる。動詞を重視する文化の導入を検討する必要があるかもしれない。それはともかく、英米人のリズムや慣用表現を真似る必要はないと考えているが、t h、v や l など子音の発音は正確でなければと心がけている。それは伝統に頭を下げる作法の範疇である。漢字の表現力のおかげで五感の働きや、判断、行動について日本語としては、細やかな表現が可能であるが、アルファベットで表現し直

すには相当の因数分解が必要である。それより、英語を社内公用語にして英語で発想するように習慣づけければ良いのだという考えもあるだろうが、日本人固有の発想を促す意味では、認知言語学的に正しい方法かどうか疑わしい。ある程度の生物的工夫も必要であるが、なんとか知的努力で対応できないものかといつも考えている。そのささやかな提案が本ノートの、ほとんどが名詞であるローン・ワードについて持っている語感を生かして、動詞の意味を連想して英語表現に活用しようというものである。専門家から見れば、ばかばかしい提案かもしれないが、たとえば「ヒント」と言う名詞から、少し皮肉っぽく相手の言いたいことを問いただすときの動詞 **hint** は、連想が容易で一度使えば忘れられないものである。筆者のようにあまり記憶力の良くない者にとっては、英単語を覚えることも苦勞の種である。これに対しては、ラテン語由来などの語源の学習で対応しようとしてきた。特に接頭語が単語の意味を担うことが多く、漢字やドイツ語と似た一面として、英単語に親しみを持つきっかけにもなった。**co-**は、「と一緒に」という意味だから、**coexistence** は共存。**ex-**は、「から外へ」という意味だから、**explanation** は説明。**re-**は、「再び」という意味だから **recycle** は再利用と言った具合である⁵⁾。もちろん、語源は万能ではないが、言語に親しむことで記憶につなげる意味で重要だ。コンピュータの歴史に係る英論文を輪読する際に、この方法を学生に薦めたがあまり目立った反応はなかった。もっとも、英語表現で一番重要なのは、主語・述語が明確な知識記述を心がけ、いろんなことについて自分の明確な意見を持つことに変わりはないが。

参考文献

- 1) 英国エセックス大学の **Dr.Martin Atkinson** との **Private discussion**
- 2) 池上嘉彦「**「する」と「なる」の言語学**」、大修館、1981年
安藤貞雄「**英語の論理、日本語の論理**」、大修館、1986年
- 3) 田中茂範、川出才紀「**動詞がわかれば英語がわかる**」、ジャパントイムス、1989年
景山太郎「**動詞意味論**」くろしお出版、1996年
- 4) 長谷川 潔「**私の英語開眼**」、大修館、1996年
- 5) 上野早苗他「**へびの頭を切ろう**」現代化学、2008年9月号
岸田隆之、早坂信、奥村直史「**歴史から読み解く英語の謎**」教育出版、2002年
逸見喜一郎「**ラテン語のはなし**」大修館、2000年